

日本の幼児体育の現状と問題点

富 本 靖

The Present Conditions and Problems of Japanese Physical Education for Infants

Yasushi Tomimoto

Abstract

Quite some time ago it was said that the athletic capabilities of children and their physical strength have fallen. Because more land is used for residential purposes leaving less and less open fields the opportunities for playing outside have decreased. This has led inevitably to more time being spent indoors with television and video games. Hence it is difficult for young people to develop an athletic ability that matches their age. Ideally athletic ability should start when they are infants and increase as they approach adulthood. However, with the changes in the social environment and lifestyles this has not been possible. Therefore a study on how to develop an environment in which young people can maintain an athletic ability that matches their age is a priority nowadays. In this article I look at the present conditions and problems of Japanese infant physical education.

This paper consists of three chapters and explores the present conditions and problems of the physical education for infants. The first chapter discusses the meanings of physical education for infants and the status quo of it, featuring the infants' developmental phases. Chapter 2 examines the problems of physical education for infants and the relations between the theory of competition, personal limits and training methods. It also looks at human relationships in the course of learning physical exercises. The final chapter considers the content and environmental design of the ideal physical education for infants and seeks what we should aim for.

序 論

子どもたちの「運動能力」「体力」が落ちている、といわれて久しい。宅地化が進んで原っぱは姿を消し、外遊びなどの機会が減少すると同時に、テレビやビデオ、ゲームなどの室内の遊びの傾向が強まっている。外遊びをする機会が減れば、その結果年齢に合った運動能力や運動感覚を身につけることができにくくなり、幼児、児童、そして成年に向かっていく先の成長にも、少なからず影響を及ぼすことは間違いない。中央教育審議会は、平成13年「子どもの体力向上のための総合的な方策について」の答申において、「昭和60年ごろを境に子どもの走る力、投げる力、握力などは、全年代において長期的に低下の一途をたどっている」(注1)としている。社会環境や生活様式の変化が、これらの「低下」をもたらしたことを考えると、今の時代だからこそ、幼児期から年齢に合った運動能力を

取得できるような指導や、それに添った環境づくりについて研究を深めていく作業が必要であることは明白である。

本論では、日本の幼児体育の現状と問題点について、三つの章を通して検証していく。第一章では、幼児期において体育教育の目的がどのように位置づけられるのか、日本の幼児体育の現在の状況とその位置づけを、発達段階とも関連づけながら考える。第二章では、幼児期の体育教育にどのような問題点があるのか、競争原理や個人能力と指導方法との関係、また体育学習における人間関係についても検証する。第三章では、理想的な幼児体育教育について、その内容や環境づくりについて検討し、最終的にどのような目標を掲げていけばよいのかを考察していく。

第一章 幼児期における体育教育の目的

第一節 日本の幼児体育の現状

序論でも少し触れたように、幼児を含めた子どもの体力は、年々低下する傾向にある。それは、身体を動かす機会そのものが減少した結果であり、発達に応じた運動能力を身につける機会が失われつつある、ということでもある。前出の中央教育審議会は、体力低下の原因を次のように位置づけた(注2)。学力を中心とした知識を重視する大人社会が、外遊びやスポーツなどを軽視する傾向を生んだこと、また電車、バス、特に車などの交通手段が著しく発達したために歩く機会が減ったこと、あるいは、家庭など身の周りでは、発達してきた便利な家電製品が、子どものお手伝いの機会を減らし、運動量を軽減したのではないかと、ということである。また、情報化社会の発展によって、過去にはなかったような人間関係の希薄さが生まれ、それと同時に身体を動かして遊ぶ機会が少なくなった。都市化や少子化が外遊びの場所や、一緒に遊ぶ友だちをも減らし、また深夜に及ぶ大人の生活習慣が、子どもの生活習慣をも変化させてしまったのではないかと、と分析している。

心身共に発育・発達途上の子どもたちにとって、規則正しい、バランスの取れた生活は大人以上に重要である。大人と同じように深夜まで起きている生活をすれば、大人よりも十分な睡眠時間が必要な子どもたちの生活リズムが崩れるのは必至であり、早寝・早起きや朝食の摂取といった理想的な生活習慣を確立できず、日中の活動にも影響が出る、という悪循環につながってしまう。

日本小児保健協会が10年ごとに行っている「幼児健康度調査報告書」(注3)によれば、平成12年度の調査では、「子どもたちの遊びが家中心であり、行動範囲が狭くなっていることがうかがわれ」という結果が出ている。遊びの内容の変化、母子のみで過ごすことの多い1~3歳児、遊べる場所の確保など、「子どもを取り巻く心理・社会・物理的環境を調えることが望まれる」としていることから、子どもの生活環境の変化が、その体力の低下に大いに関わっていることは間違いなく、そのために何らかの対策が望まれていることは確かである。

土谷正規(注4)は、その著書(注5)の中で、このように述べている。「子どもたちは、年とともに弱ってきています」(注6)と。そしてその具体的な理由について、いくつかの原因を指摘している。その内容とは、「入試制度のあやまり」「親の考え方のまちがい」「管理主義の行きすぎ」「思いきり自分を出して活動する時間が確保されていない」「家庭も学校も、子どもの増健についてのしつけが薄い」(注7)などである。

学歴社会につながる現行の入試制度は、子どもの実態を無視して知識の詰め込みを強いる。その結果、幼いころから「お受験」のための塾通いや習い事などが重なって、子ども自身の自由な遊び時間

は減る一方である。親も、それが正しいと思い、家庭で本来中心とするべき教育、つまりは思い切り遊んだり、家の手伝いをしたり、挨拶をきちんとしたりといったことをさせていない。おまけに、学校でも家庭でも、子どもは管理されすぎており、干渉と抑圧がその自主性を奪ってしまうのである。さらに、そのように縛られている子どもたちは、自分を素直に、思い切り表現することができず、その結果、欲求不満が爆発してしまうことにもなりかねない。

子どもたちの自由な時間を確保し、生活リズムを見直すこと、十分な睡眠時間や身体を動かす時間を保持することが、成長期の子どもたちにとって、健康な生活への必要な要素といえるのである。体育は、そのための重要な架け橋として位置する教育といえるだろう。そして、健康な生活があってこそ、健全な精神が生まれ育つに違いない。

大人がよかれと思い込んでいることが、子どもたちの心と身体を縛り付けていないだろうか。大人は、子どもの本当の心を知ろうとしているだろうか。子どもたちを取り巻く社会環境の変化もよく見極めつつ、今一度、健康な生活を送るためにできることを見直し、そのための有効な手段として、幼児期における体育教育について、考え直す必要があると考える。

第二節 幼児教育の中での体育の位置づけ

では、実際に幼児教育において、「体育」はどのように位置づけられるべきであろうか。第一節で述べたように、現代の子どもたちは、思い切り遊んで身体を動かす機会が少ない。身体を動かすことの重要性は、生まれたときからすでに始まっている。つまり、「子どもは乳幼児から這う、寝返りを打つ、立つ、歩くと、自分の力で動こうとします。子どもの自己表出、自己表現というのは体で表わすことから始まるのです」(注8)という言葉にもあるように、生きていく上での大切な要素が、「身体を動かすこと」に数多く含まれているのである。「体育」という教科やひとくくりの教育科目というよりは、子どもたちの生活の中で、身体を動かすあらゆる場面に、重要な関わりを持ってくる方法論こそが「体育教育」である、ということができよう。

もともとスポーツとは、遊びが発達して競技になっていったものがほとんどである。子どもにとっても、勝ち負けだけではなく、遊びの部分があってこそ、夢中になって運動に取り組めるに違いない。全力で遊びに取り組む中で、友だちと協力したり争ったり、仲良くしたりけんかしたりしながら、共に育ち合っていくのである。

しかし、最近の子どもたちは、自ら遊びを作り出すという力に欠けているように思われる。これは、体験していかないと身につかないことであり、その「作り出す力」こそが、生きていこうとする力、自分で考えていく力の基礎となっていく。友だちや先生と一緒に歌ったり踊ったり、思い切り身体を動かして何かをしたりする機会を数多く設けることで、子どもたちは他人との関わりや相互の援助関係を学んでいくのではないだろうか。

発達的な視点から、「体育」について、デビット・L・ガラヒュー氏は次のように述べている。「体育」における「動きを学ぶという目的は、運動スキルの習得と体力の向上に基礎を置いて」(注9)おり、「運動を通して学ぶという目的は、効果的な体育は子どもの認知的、情緒的(社会感情的)能力の発達に好ましい影響をもたらすという事実に基づく」(注10)。このことから、体育と子どもの心身の発達が、密接な関連を持っていることがわかる。

「体育」とは、その決められた時間に身体を動かすことだけが目的なのではない。身体を動かすこ

とすべてが、幼児期に必要な不可欠な心身の成長へとつながっていく、それがすなわち「体育」なのである。幼児体育の理念とは、「人間形成の根幹を培う幼児期の子どもたちを対象として、幼児の心身の特徴に留意し、幼児の発達段階に即した方法で身体運動を行うことによって、健全な心身発達の促進をはかる教育的いとなみである」(注11)とあるように、それぞれの子どもの発達に応じた、有効な「体育」のあり方を考える必要がある、といえよう。

第三節 子どもの発達と体育教育の関連性

前節では、幼児期に必要な不可欠な、心身の成長へとつながっていくことこそ「体育」であり、そのために子どもの発達に有効な体育のあり方を考える必要があると述べた。本節では、具体的に子どもの成長や発達に幼児体育がなぜ必要なのか、どのように関係しているかを考える。

たとえば、最近の幼児は骨折などのケガをしやすい、といわれている。特に増えているとされる頭部や顔面部のケガについては、「骨発育の未熟と防御反射機能の低下によるもの」(注12)であり、その根本的な原因として運動の経験が不足していることが考えられる。

これらの運動経験の不足は、身体の発達だけの問題ではない。第一章第一節でも述べたように、都市化や少子化によって人間関係が希薄となり、身体を動かして思い切り誰かと一緒に遊ぶ、という経験を少なくさせているという現状がある。このような経験の不足が、他人とのかかわり方を十分学べていない、社会性の未熟さという課題を残したまま成長してしまうことにもつながってくると思われる。幼少のうちから、その年齢に応じた社会性を学んでいく機会の重要性は、学校などでうまく友人たちとつきあえず、不適応状態になってしまう子どもたちのことを考えれば、極めて明白である。

もともと、子どもの発達を研究するフィールドとしては、認知、情緒、心理運動などといった個々の分野において進められることが多かった。しかし、本来はこれら全体が統合され、相互に関連していることを考えながら、発達の視点に立った体育を行っていくべきであろう。そして、それぞれの発達段階に応じ、それに適合する身体運動とはどのようなものか、つまり、「運動の質（種類）と量（強さ・時間）との適正レベルをきちんとつかんでおくことが大切」(注13)であると考えられる。

また、幼児の生活行動は、ほとんど遊びで成り立っている。つまり、健康や体力の増進も、運動技能の習得も、遊びの中で獲得していくのが自然な成り行きであろう。遊びの機会が少なくなり、十分に行われなくなってきた昨今、「幼児体育」という形でアプローチすることは、極めて重要なことであると考えられる。そして、遊びの本当の目的や意味が、幼児体育という学問の中で、体系的に具現化されることが必要なのではないだろうか。前出のガラヒュー氏は、体育において「個人独自の発達レベルに根ざした運動制御と運動における有能さの習得を重要視」(注14)するとしている。特定の年齢に応じて何をどのように教えるかということは、活動を選択するときのガイドラインに過ぎず、それぞれの子どもたちに応じたカリキュラムをメインに置くことが大切であると説いており、それは体育教育がいかに「パーソナルな部分に影響を及ぼすか」ということを考える指針になるであろう。

これらは、幼児体育に対して、指導者が「全人格的教育を行うという姿勢で取り組むことが求められる」(注15)ことにもつながっていく。幼児の心身の発達とは、全身を使った、活発でスケールの大い活動の場で『行動しながら学び』、しかも『総合学習』していくという特徴を持っている」(注16)ため、運動的な事柄だけに目を向けるのではなく、そこで起きる精神的なこと、社会的なことにも注目しなくてはならないのである。

第二章 幼児体育教育の問題点

第一節 競争原理から考察した体育教育の影響

2月に開催されたトリノ冬季オリンピックで、荒川静香選手が男女通じて日本フィギュアスケート界初の金メダルを獲得した。日本中を感動で沸かせ勇気を与えてくれたことは、まだ記憶に新しい。それをのぞく他の競技も、順位だけをみれば、もう少しでメダルに手が届く惜しい成績が多く、十分健闘した大会であったといえるのだが、そのことについて、日本選手団の選塚研一団長は、成績が振るわなかったことを国民に「謝罪」し、「国内で競争原理を導入し、戦う選手団にする」と締めくくった(注17)。しかし、もともとは本部の分析力に甘さがあり、過剰な期待を寄せ「メダルの獲得目標は5つ」といった発表を早々に行っていた(注18)からで、これまでに日本のスポーツ界に競争原理がなかったという印象を持たせるような発言は、あまり好ましくないのではないだろうか。スポーツには、互いに切磋琢磨し、競い合っていく側面があるものだし、また、オリンピックのもともとの精神が「参加することに意義があり」とは誰もが知っていることであるが、近年はそれが崩壊し、それこそ市場における競争原理と同じような様相を呈していることは周知の事実である。

同じようなことは、体育教育の中でも起きている。「もっとうまく」「もっと早く」「もっと高く」と、いかに高度なことをこなせるかどうか、あるいは勝負に勝てるかどうか、といった結果的視点ばかりが強調され、その過程がおろそかにされてはいないだろうか。もはや、体育教育だけではなく、子どもの教育全般にそれらの考え方が蔓延している。学歴社会によって、受験戦争は年々過熱すると共に、年々低年齢化しているのが実情である。もちろん、誰かと競争しながらひとつの課題にチャレンジすることは、個々の意欲を活性化させ、より高みを目指すための呼び水にはなるであろう。しかし、大切にされるべきことは、そのような意識を持つことができるという過程であり、最善を尽くそうと努力する意識そのものである。結果はそのあとで付随的についてくるものであり、結果がどうであれ、自分がベストを尽くしたことを実感させ、共に努力した相手をも思いやり、取り組んでよかったと思わせるための働きかけこそが不可欠であると考ええる。本来の「競争原理」とは、いわゆる「勝ち組」「負け組」といった二極分化のためではなく、お互いが切磋琢磨する中で、より高度なものを生み出していくための手段であるべきではないだろうか。

特に、子どもは大人のミニチュアではなく、心も身体も未発達で、大人への成長の過程の中にある。だからこそ、競争の結果だけにこだわるのではなく、過程にこそこだわるべきである。また、「勝った」「負けた」、あるいは「できた」「できなかった」という単純な類別に結果を見いだすのではなく、個々の発達や個性に応じて、「どのように」「どこまで」「どの部分が」といったディテールにこそ、心を配り見極めていかねばならない。「競争」は、体育教育を助けるための、ほんのひとつの手段に過ぎないのである。

第二節 個人の身体・精神的な能力と指導上の影響

健康に「身体」の部分と「心」の部分があるように、身体を通しての教育、身体を育てる教育＝体育を指導するにあたっては、身体的能力にかかわる部分と、精神的な能力にかかわる部分が存在する。1989年(平成元年)に国際連合の総会で採択された「子どもの権利条約」によれば、第29条の「教育の目的」として、「(前略)子どもの人格、才能ならびに精神のおよび身体的能力を最大限可能なま

で発達させること（後略）」(注19)としており、心身共に統合的な教育が求められている。体育教育は、それが最も具現化された、わかりやすい形の教育なのではないだろうか。

就学し、クラブ活動やスポーツ少年団などに籍を置くようになると、主に身体的能力の向上を助ける手段として、精神的能力への働きかけが顕著となる。たとえば、忍耐やねばり強さ、より上を目指そうとする向上心、指導者の言葉を聞き入れる素直さ、団体競技なら連帯感、上の学年なら後輩をたばねるリーダーシップなど、さまざまな精神的資質が要求されてくる。ともすれば、これらが「精神論」に傾きすぎ、「もっとがんばれ」「努力」といった言葉だけで、身体的能力を高めることを促されてしまうこともあり、それには注意しなくてはならないであろう。

子どもの場合はどうであろうか。どの年齢にもいえることだが、指導者は、やはり能力の優れた子どもにより多く対応していないだろうか。これは、体育教育に限ったことではないが、ひとつの授業を行うとき、能力の高い優れた子どもを誘導役とし、他の子どもを彼らになびかせていくとうまくいく、と思われがちであり、事実そうしている指導者も多い。もちろん、「どの子どももうまくできるようにしてやりたい」という思いはありつつも、ひとつの目標をクリアしていくためには、どうしてもそのような傾向になりがちなのである。しかし、体育教育の目標が、年齢に応じた心身の健全な発達を助けることを鑑みれば、身体的能力、精神的能力のいずれにかかわらず、「弱さ」を持った子どもに注目していく必要があるのではないだろうか。それは、個々のパーソナリティーを見つめ、一人ひとりの心身の発達に合った働きかけが必要であるという原点にもつながってくる。

では、弱い子どもとはどういった子どもか。前出の土谷は、わかりやすく具体的に、次の4つのタイプに分けている。1. 身体的に弱い子 2. 精神的に弱い子 3. 社会的に弱い子 4. 情緒的に弱い子(注20)である。まず、身体的に弱い子には、病気、ケガの他にも、すぐに疲れたり、運動ができない、自分で遊べない、体育の授業を見学する、などの特徴をあげている。精神的に弱い子には、運動そのものが嫌い、じっと集中できない、乱暴や気ままする、やる気がない、イメージが持てない、我慢ができにくい、自分で自分を弱い立場に置こうとする、探し求める行動がない、などをあげている。また、社会的に弱い子として、ひとりぼっちで仲間に入れない、自分の位置がつかめない、友だちを阻害する、助けたり見合ったりできない、約束が守れない、順番をくずす、何か言われたりされたりしても返せない、などの弱さをあげている。情緒的に弱い子には、すぐに怒る、嫌だ、嫌いだと言う、運動の喜びや、成功の喜びを感じ取れない、自分の利害を忘れて深い怒りが持てない、などをあげている。これらの心身的弱さを持つ子は、指導者誘導型の教育では、その枠から飛び出してしまう子どもたちであろう。だが、これらの「弱点」が、「人間として認めてもらえない立場に立たされることも多い」(注21)のである。できる、できないがハッキリと表面上にあらわれてしまう体育活動においては、指導者はこの点に十分な気配りをする必要があると考えられる。心の未発達な幼児においては、なおさらであろう。これらの「弱さ」を持つ子どもたちをフォローするには、指導者の援助と周りの友だちの協力が大きい力となる。そのために、一人ひとりを大事にし合うという位置づけを、指導者の働きかけによって、集団全体に浸透させていくことこそが、今の体育教育に必要なのではないだろうか。

第三節 体育学習における歪み（先生と生徒、生徒間）

第二節でも述べたように、年齢に応じた発達段階の目標はあったとしても、それをクリアできてい

ないさまざまなタイプの弱さを持った、心身の未発達な子どもたちが、数多く存在する。その結果、体育の学習全体を、さまざまな問題を抱えた子どもたちの一括指導の場としてしまうと、どうしても歪みが生じてくる。指導者が子どもたちの信頼を得た上で指導するということは大前提であるが、これがしっかりと確立できていないと、どんなに指導者が心を砕いても、子どもたちの心に直接届くことはないし、ましてや指導における目標や目当てを獲得することは不可能であろう。

体育学習においては、何かと結果を重視しがちである。段階に応じた運動を、こなせるか、こなせないかといったことが評価の対象となり、こと競技になると、どれぐらいのタイムでできたのか、どれぐらい得点ができただけか、などといった結果主義に陥ることが多い。「できた」「できなかった」ということだけに注目するなら、その場でうまくできる子だけが注目を集めるのは当然のことであり、全体を指導しているとはいえない。当然、子どもと指導者との信頼関係は成り立たない。自分のことを認めてもらえないからである。

また、我が国の風潮として、指導とは教え込むものである、と考える傾向が強いようである。確かに、それもひとつの指導方法ではあるが、時間の短縮や能率化、即効性といった利点がある反面、「教えるもの」と「教えられるもの」は相対する形となり、教えられる側が受け身になりやすい。自ら考え、検討・工夫をこらし、問題を解決していこうというポジティブな面が失われてしまうというデメリットが考えられる。ここには、仮に「師弟」という間柄の信頼関係が成り立ったとしても、それを個々人のステップアップにつなげていくことはできないだろう。いわれたことしかできなければ、それは自ら生きていく力にはつながっていかず、いつかは破綻することが予測されるからである。

では、指導される側同士、子どもたち同士の関係はどうだろうか。前節にも述べたとおり、さまざまな弱さを抱えたタイプの子どもがいる。また、顕著な弱さでないにしても、個々がそれぞれのパーソナリティを持っており、性格によって考え方もあらわれる態度も違う。たとえ同年齢でも、年齢が低ければ低いほど月齢による差は大きいし、家庭環境なども大きく作用するだろう。

大人社会のように、本音と建て前をまだ上手に使い分けることができない子どもにとって、その「本音」の部分を受容し受け止めてやれなければ、指導は成り立たない。指導者ですらそうなのだから、子ども同士ではなおさら摩擦が起きる。体育では、他の教科よりも、うまくできるかできないかが一目瞭然であり、その結果だけをとり、指導者がほめたり叱ったりするのであれば、よけいに亀裂は広がるばかりである。子ども一人ひとりの性質や能力に合わせて、それぞれが持つ長所や短所を見極めていけるような、指導者としての資質が求められているのである。

第三章 理想的幼児体育教育とは

第一節 幼児期における必要な体育教育とは

幼児の生活は、極めて流動的でメリハリがないので、カリキュラムとしては、あまり細かく立てず、臨機応変に対応できるような弾力性のあるカリキュラムを立てる必要がある。まず、年齢などの発達段階に応じた活動を検討し、どのように日常生活全体を巻き込んでいくかよく吟味しなくてはならない。では、どの程度を標準としたレベルで考えればよいのかというと、だいたい「70%水準ということを目安」(注22)にすればよいのではないかと考えられている。これは運動能力が正規分布すると仮定した場合なので、一概にそれがすべてに当てはまるとは言い切れないが、だいたいの目安になると考えてよいであろう。

次に、いかに活動の欲求を動機づけるか、ということが考えられる。指導者の意図した方向に持って行けるように、さまざまな働きかけをし、積極的、自発的にやってみようという気持ちを起こさせるものである。無理強いすれば反発するであろうし、目標が高すぎれば、やる気は起きないであろう。また、易しい課題ばかりだと、興味を削いでしまうことにもなりかねない。それぞれの発達段階を見据えながら、いかに子どもたちの向上心を引き出すかが、勝負の分かれどころである。

特に年齢が低い場合は、気をつけねばならないのが「個人差」である。たとえば、幼稚園の入園時に、4月生まれの子と次の年の3月生まれの子では約1年の開きがあり、生活習慣をはじめとする発達段階の差は、著しいものがある。それに加えて、各個人の持つパーソナリティーが存在し、よい面と悪い面、それぞれに違ったものを持っている。さらに家庭環境などによる違いもあるだろう。つまり、画一的な指導は意味がなく、「ひとりひとりの子どもの性質や能力に合わせて、その長所短所に触れて指導することが大切」(注23)といえよう。さらに、「ひとりひとりの子どもが、その子どもなりにどのように伸びたかという『個人的変動』に注意を払う」(注24)が必要となってくる。子どもによってパーソナリティーが違えば、そのときの獲得目標も違うはずである。何かひとつのことが「できた」「できない」だけでなく、「〇〇がこれぐらいしかできなかったのが、こんなにもできるようになった」「今日は、こんなことができた」などといった、個々に応じたきめ細かな視点が不可欠なのである。

これらの指導は、段階を踏んで行われる必要がある。遊びの系統的段階については、次のようにまとめられている。1. 姿勢変化・平衡運動系 2. 移動動作系 3. 操作動作系(注25)である。さらに、2歳までは、「立つ・座る・しゃがむ」などの1の動作、3~4歳では、「走る・飛ぶ・登る・すべる・飛び降りる」などの2の動作が中心で、「投げる・受ける・転がす・止める」などの3の動作も行われるようになり、5~6歳では、「投げ込む・蹴る・当てる」などといった3の動作が非常に多く行われるとしている。これらの系統的発達段階に即した適切な指導が必要であることは、これまで何度も述べてきたが、それ以外にも、簡単なことから複雑なことへ、容易なことから難しいことへとといったように、発展をも見据えた、段階を踏んだ指導が必要である。また、いろいろな段階の運動を繰り返すうちに、統合されてより高度なことができるようになっている場合もある。子どもは、遊びが生活そのものであり、生活の中にこそ遊びがある。生活の中に、遊び=体育教育が生きていくような、魅力ある指導と工夫が求められる。

第二節 幼児体育教育に必要な環境づくりについて

これまで述べてきたような、子どもの発達段階や個別のパーソナリティーに応じたきめ細かな指導を行うためには、どのような環境が求められるだろうか。

体育教育が健全に行われる環境づくりやその管理について、土谷は次のいくつかの点をあげている(注26)。まず、1つ目は運動学習を満足させられるような運動場の整備である。遊具などの固定施設を、なるべく一箇所に集めるようにすれば、指導者の目が行き届くようになり、グループでの活動もしやすい、としている。また、「築山」は幼児にとって、山あり谷ありといった変化のある場所として、面白く遊ぶことができ、その分、運動効果も大きい。現在の大人たちがかつて子どもだったころは、そのような場所が学校や幼稚園以外の野山や原っぱに、たくさんあった。平坦なグラウンドでは生まれえない楽しさが、そこには存在する。また、体育器具の倉庫を充実することも忘れてはならな

い。子どもたち自身が出し入れできるような広さや整頓の工夫が必要である。砂場や鉄棒、広場などの充実も、体育教育の充実には欠かせない整備要項である。

さらに、運動場は小石やゴミが落ちていない状態を保たなければならない。捨てる場所をあらかじめ決めておき、「見つけたらすぐ拾って捨てることを運動場使用の約束にしたらい」(注27)というのは、教育という面でも大変よい効果をもたらすものと考えられる。また、全員で取り組む清掃時間を利用するのもよいし、保護者にも協力をあおいで、学校や幼稚園・保育園ぐるみ、さらに広く考えて地域ぐるみで清掃や草抜き、地ならしなどに取り組めば、運動場が整備されるだけでなく、ひとつの行事としての成果をあげることができるであろう。そうすれば、昔のように「はだして運動場を歩く」という選択肢もありうるかもしれない。

室内においては、体育館などの室内運動場の整備が必須である。器械器具や用具が充実し、よく整備されていることが必要となる。最近では、老朽化した体育館や施設を新しく建て直すことも多いようであるが、新しいから、傷つけてはいけないからといって自由に遊べないのは、本末転倒であろう。雨の日などは、必然的に運動量は少なくなり、運動できる限られた場所としての体育館の利用は、最大限に行われるべきであると考えられる。

学校・幼稚園などの教育施設以外の場ではどうであろうか。たとえば、スポーツ少年団であったり、体操教室であったり、公民館でのクラブ活動であったりと、その主宰する団体も目的も個々違うわけであるが、共通することは、身体を思い切り動かす機会が極端に少なくなっている現代の子どもたちが、安心して運動できる場をもっと増やしていかなければならない、ということである。それは、子どもたちが自分たちで生きる力を育てていくための、大きな原動力にもなるであろう。

子どもの心と身体は、極めて密接な関係を持っており、心身共に健全な発達を促すために一番必要なのは、親や指導者をはじめとする大人たちが、そのための機会を奪わないことである。ただ、交通が発達して車の量も増え、開発が進んで子どもの遊び場が減ったこと、地域全体で子どもを育てるといった視点が弱くなってきていること、社会的弱者である子どもに牙をむく犯罪が増加してきたことなど、さまざまな外的要因によって、子どもたちの安全の確保が難しくなってきたという現状がある。我々大人たちは、すべての子どもたちが生き生きと育つような環境をつくるために、ますます邁進しなければならないのである。

第三節 幼児期の体育教育における目標とは

最後に、幼児期の体育教育において、持つべき目標について考える。これまで述べてきたように、子どもの心身の発育・発達と体育教育は、切っても切り離せない関係にある。また、心と身体が螺旋状に相対して発達していく子どもと、体力的にも精神的にも完成された大人とは、まったく異なる存在である。子どもは、大人を小型化したものではない、とよくいわれるとおり、大人と同じ内容や方法、目標を、子ども向けに手加減すればよい、ということにはならない。それぞれの発達段階や個性に応じた働きかけが必要となるのは、当然のことである。

子どもにとって、体育をはじめとする運動全般を、得意とする子もいれば、苦手とする子もいるであろう。大人なら、多少苦手意識があっても、自己の健康増進や維持管理、自らが掲げた目標に対して忍耐強く進めることもできる。これに対し、子ども、特に年齢が低い幼児にとっては、身体を動かすことは遊びそのものであり、特に何か目的があって取り組んだり、面白くないのに続けたりするこ

とは難しい。子ども自身がその運動の中に楽しみを見つけなくては続かないのである。まず、いかに楽しく続けることができるかということが、大前提となるであろう。もう少し年齢が上がれば、授業として取り組む中で、思い切り身体を動かすこと自体に爽快感や解放感を感じたり、友だちとの関わりの中での楽しさや難しさ、個人や団体での達成感などを味わったりすることもできるようになる。指導者が、指導する集団の発達段階を正しく認識し、個々へのフォローをきっちりと行うことで、集団としての目標も達成されていくに違いない。

「体育は、運動学習に陥ってはならない」(注28)と土谷が述べているように、体育が単なる運動という教科ではなく、それらを含む行動すべてが、子どもの健全な発育に直結していくという根本的な部分を忘れてはならない。それは、子どものすべての生活を体育的な見地で育てていく、という意味でもある。

では、最終的にそこでどのような力を育てていくべきなのかを紹介する。(注29)

1. 自分で見つけ、つくっていく能力
2. 体で感じ、覚え、体の自信をもち、自分を知っていく能力
3. 友だちを知り、共励する能力
4. 命を大切にして、生きぬこうとする能力
5. 生活を切り拓く能力

自分で新しい考えを生み出し、我慢強く努力していくこと、お互いを大事にし、助け合い、生きていくことに自信や意欲を持つことなど、心の発達に関わるさまざまな要素が含まれていることがよくわかる。身体能力の発達と、精神力の発達が統合されていったとき、初めて社会的に大人への階段を一步上がることができるのではないだろうか。

体育教育においては、知識や技術だけを教える場ではなく、「共に生きる実践の場」という目標を掲げ、そのための努力を惜しまない場となっていく必要があると考える。

結 論

以上、日本の幼児体育について、その現状や位置づけ、発達との関連、指導上の問題点、理想とする目標を順に述べてきた。

その中で、今後の幼児体育教育に求められるものは、「生きる力を形成する」ための取り組みであると思われる。子ども自身が自ら思い切り身体を動かし、それによって心を解放しなくてはならない。それが生きる力としての「やる気」につながり、生活を作り出していく原動力となるに違いない。

人間として、発達に応じた体力をつけ、健康を増進していく生活の実践を通じて、自分で新しいことを発見、創造し、友だちと関わることでお互いの人間関係をより発展させていこうとする意欲を目覚めさせる教育。そして、子ども一人ひとりに、その自覚を促していく教育。それが、幼児体育のあるべき姿といえよう。これらを体得することが、すなわち「生きる力」となり、「意欲」や「喜び」を生む。明日の子どもたちをたくましく育てていくための、教育そのものなのである。

注

- 1 「子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申)」文部科学省 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/021001a.htm#g0203

- 2 同注 1
- 3 「平成 12 年度幼児健康度調査報告書」 社団法人日本小児保健協会 愛育ねっと関連情報より
<http://www.aiiku.or.jp/aiiku/jigyoo/contents/kanren/kr0108/kr0108.htm>
- 4 奈良文化女子短期大学教授, 近畿小学校体育研究会 (土谷体育研究会) 会長等歴任
- 5 『子どもが生きる体育学習 総合学習へのアプローチ』 土谷正規著 あゆみ出版 初版 1998 年 1 月
- 6 同注 5 p. 8
- 7 同注 5 pp. 9-13
- 8 同注 5 p. 15
- 9 『幼少年期の体育 発達の視点からのアプローチ』 デビッド・L・ガラヒュー著 杉原隆監訳 大修館書店
初版 1999 年 12 月 p. 10
- 10 同注 9 p. 10
- 11 『改訂新版 幼児の体育指導』 勝部篤美編 学術図書出版社 初版 1990 年 4 月 p. 4
- 12 同注 11 p. 4
- 13 同注 11 p. 5
- 14 同注 9 p. 13
- 15 同注 11 p. 5
- 16 同注 11 p. 5
- 17 毎日新聞 2006 年 2 月 27 日 (月曜日) 朝刊 14 版
- 18 「日本代表選手団・遅塚研一団長に聞く 第 20 回オリンピック冬季競技大会 (2006/トリノ) への抱負と期待」 財団法人日本オリンピック委員会
<http://www.joc.or.jp/stories/specialinterview/20060120chizuka.html>
- 19 「子どもの権利条約 (国際教育法研究会訳)」 http://www6.ocn.ne.jp/~ncrc/doc_lrcj.htm
- 20 同注 5 pp. 50-51
- 21 同注 5 p. 52
- 22 同注 11 p. 50
- 23 同注 11 p. 51
- 24 同注 11 p. 52
- 25 同注 11 pp. 52-53
- 26 同注 5 pp. 154-157
- 27 同注 5 p. 156
- 28 同注 5 p. 226
- 29 同注 5 pp. 227-228

参考文献

- 『子どもが生きる体育学習 総合学習へのアプローチ』 土谷正規著 あゆみ出版 初版 1998 年 1 月
『幼少年期の体育 発達の視点からのアプローチ』 デビッド・L・ガラヒュー著 杉原隆監訳 大修館書店
初版 1999 年 12 月
『改訂新版 幼児の体育指導』 勝部篤美編 学術図書出版社 初版 1990 年 4 月
『「こころ」はだれが壊すのか』 滝川一廣著 佐藤幹夫聞き手・編 洋泉社 初版 2003 年 2 月

参考サイト

- 「子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申)」 文部科学省 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/021001a.htm#g0203
「平成 12 年度幼児健康度調査報告書」 社団法人 日本小児保健協会 愛育ねっと関連情報より
<http://www.aiiku.or.jp/aiiku/jigyoo/contents/kanren/kr0108/kr0108.htm>
「子どもの権利条約ネットワーク」 <http://www6.ocn.ne.jp/~ncrc/index.htm>
「からだの危機と人間性の問題を問う—教育領域からの緊急提言—」 人体科学会関西支部
<http://www.smbs.gr.jp/2002/wwg/karada.htm>
「財団法人日本体育協会」 <http://www.japan-sports.or.jp/>
「財団法人日本オリンピック委員会」 <http://www.joc.or.jp/index.asp>

*参考サイトは、いずれも 2006 年 4 月 1 日現在のものである。

(とみもと やすし 子ども教育学科)